

## 一―五、羽衣の構成―段と小段

永原 順子

本稿では、能の構造の単位である段と小段について解説する。

能は言うまでもなく演劇であり、シテやワキなどの登場人物が舞台に現れ、物語が展開していくのだが、その進行は形式化されている。謡の節やリズムだけでなく、囃子の構成、そして登場人物の動きも、様々な法則に従って作られている。多くの研究者がそれらの法則に着目してきたが、これらの法則を体系的に積層構造としてまとめたのは、横道萬里雄氏である。一字一字の「字」が集まって「句」という単位となり、「句」が数個集まって「節」となり、といったように、層を積み重ねた構造となっている。以下にその概要を示す。<sup>1)</sup>

句 ↓ 節 ↓ 小段 ↓ 段 ↓ 場 ↓ 能一番

このうち、最も重要な構造が「小段」であり、この形式化されたパーツともいえる「小段」が組み合わさって能の基本構造を支えている。「小段」には、謡を中心に進行する謡事、囃子のみで演奏される囃子事、がある。例えば、能の最初の部分はこれとこれ、といったような基本の組み合わせ方があるのだが、すべてが完全に同一であるというわけではなく、そのパターンを崩したり、逆にあまりない組み合わせを作ったりすることによって、作品ごとの個性や魅力が生じている。

「小段」の上位にある構成単位は「段」である。「段」は、ワキが登場する、ワキとシテが語り合う、などの内容のまとまりで区切られるが、それらは形式としても一つのまとまりとなっていることが多い。

その上位の概念である「場」は、能の構成単位のうち、最も大きいものである。ごく少数の例外を除き、能の作品は一場物と二場物に分かれる。シテなどの登場人物が幕に入る、いわゆる中入なかいりで前場が終了してから、再び後場が始まるものが二場物、中入のないものが一場物である。羽衣は中入がないので、後者の一場物に分類される。まずは、羽衣の「段」の構成を見ていきながら大まかな筋を掴み、その後「小段」ごとの解説にうつりたい。

この作品の典拠となっている羽衣伝説は、天人女房譚ともいわれ、類話が世界各地に広く分布している。天女が地上の水域（川、湖、海など）に天下って水浴をしていると、人間の男が天女の衣、羽衣を取り上げてしまつて、天女と結婚する、というのが標準な筋であるが、話の展開は多種多様である。能では、男が羽衣を返して、天女は天に帰るという結末となっている。

能の羽衣は、話の展開および小段の組み合わせのパターンなどによって、以下の六つの「段」に分けることができる。

- 一、漁夫（ワキ）が数名の漁夫（ワキツレ）とともに登場し、三保の松原の情景を描写する。
- 二、漁夫が松にかかった羽衣を見つけて持ち帰ろうとすると、天女（シテ）が登場して衣を返してほしいと頼む。
- 三、天女と漁夫の問答の末、天女が天人の舞樂を舞って見せるこ

とを約束する。天女は漁夫から返してもらった羽衣を着す。

四、天女が三保の松原の景色を愛でながら舞う。

五、天女が、妙なる音楽に合わせてさらに美しく舞う。ここでは

囃子のみで舞う、序之舞と破之舞が中心となる。

六、天女は、舞楽を舞い終えたあと、様々な宝を降らしつつ富士の高嶺の霞にまぎれて去って行く。

これらを概観すると、羽衣伝説の筋書きに当たるのは一〜三の段であり、後半の四〜六の三つの段は天人の舞楽を描くことに集中していることがわかる。では次に、それぞれの段がどのような小段で構成されているのかを見ていこう。

下記、【一声】、「一セイ」…と書かれている一つ一つが小段名であるが、□は、上述の囃子のみで演奏される囃子事、◇は、謡を中心に行進する謡事(囃子の有無の違いあり)、をそれぞれ表している。謡事には、謡の音節が囃子の八拍子に合っている拍子合(ひょうしあい)と、囃子の八拍子に合っていない拍子不合(ひょうしあわず)がある。囃子の伴わない〔詞(問答)〕もある。

## 一、漁夫の登場

地謡、囃子方が、座に着くと、後見が松の作物を持って出て、舞台の正先に置き、衣を松にかける。後見が舞台から去ると、【一声】の囃子となってワキ(白龍)・ワキツレ(漁夫二人)の登場となる。

### 【一声】

登場に用いられる囃子事である。諸ヒシギという甲高い笛の音から始まり、大鼓と小鼓が打ち出す。この一声の途中でワキとワキツレが現れ、舞台中央にて向き合う。

〔一セイ〕かざはやのうらびとさわぐなみじかな

高音域を主とする七五調の短い小段。拍子不合。【一声】から続けて演奏されることが多い。

〔サシ〕これはみほのまつばらにくこころそらなるけしきかな

拍子不合で文意を主としてさらさらと謡われる。〔サシ〕・〔下歌〕・〔上歌〕と連続する例が多い。ワキが自分の名が白龍であると告げた後、ワキ・ワキツレ全員でのどかで美しい三保の松原の情景を謡う。

〔下歌〕わすれめやくちつれいざやかよはん

低音域の旋律を持つ七五調の謡を平ノリで節付したものの一つ。拍子合。ワキ・ワキツレが三保の松原へ向かうことを謡う。

〔上歌〕かぜむかふつりびとおほきおおねかな

高音域の旋律に始まる七五調の謡。拍子合。平ノリ。朝風の海に釣船が多く浮かんでいることを描写する。最後は低音域で段のまとまりをつけるように終わり、囃子も一旦静まって終わる。ワキは後見座に行き、竿を扇に持ち替えて出る。

## 二、天女の登場

〔詞(問答)〕われみほのまつばらにあがりさりとてはかへしたびたまへ

旋律は付けられていないが、独特の抑揚がある。囃子は伴わない。問答のある詞では、登場人物の対話が進んでいく。この小段では、ワキとシテ(天女)との掛け合いが謡われる。ワキが三保の松に美しい衣が掛かっていることに気付き、持って帰ろうとするとシテが登場して返すように願う。

〔カカル(掛合)〕このおんことはをきくよりもちからおよばず、せんかたも

前置の〔詞（問答）〕同様に、人物の対話が続くが、高音域を中心に少し旋律のある謡となる。拍子不合。一部旋律のない、問答の謡もある。大鼓と小鼓が演奏を始め、対話を盛り上げていく。最後の部分はシテとワキとの謡が短く呼応され、衣を返さないワキに対して悲嘆にくれるシテの様子がテンポ良く表現される。

〔上歌〕なみだのつゆのたまかづらゝめのまえにみえてあさましや  
高音域の旋律に始まる七五調の謡。拍子合。平ノリ。シテの憔悴を地謡が表現する。

〔下ノ詠〕あまのはらゝゆくへしらずも

低音域で和歌をしみじみと謡う小段。拍子不合。シテの謡によって、天に帰れない悲しさが描写される場面。

〔下歌〕すみなれしゝうらやましきけしきかな

低音域の旋律を持つ七五調の謡。拍子合。平ノリ。〔下ノ詠〕でシテが謡った悲哀の心情を受けて、地謡がシテの心情を代弁して謡う。

〔上歌〕かりょうびんがのなれなれしゝそらにふくまでなつかしや  
高音域の旋律に始まる七五調の謡。拍子合。平ノリ。引き続き、シテの心情を地謡が描写するが、美しい景色と対比させることによってシテが天を恋しく思う気持ちさらさら強調される。前の段と同様、最後は低音域で終わり、囃子も一旦静まって終わる。

### 三、天女と漁夫の問答

〔詞（問答）〕いかにもうしさふらふてんにいつわりなきものを  
前段の最初とおなじく、独特の抑揚がある、囃子を伴わない小段。ここでもシテとワキの問答がある。悲壮感の漂うシテに対してワキの心情が動き、衣を返そうと提案する。交換条件として天人の舞楽を見たいとワキが頼むと、シテは羽衣がないと舞えないと主張するので、衣

を返せば舞を舞う約束を違えてそのまま帰ってしまうのでは、とワキは疑念を抱く。シテは「いや疑ひは人間にあり。天に疑ひなきものを」と断言する。日常の会話に近い交渉の問答が続くだけに、シテの最後の謡がまさに天そのものから発せられるごとく印象づけられる場面である。

〔カカル〕あらはづかしやゝころもをかへしあたふれば

高音域を中心に少し旋律のある謡。ここは二句のみの短い小段となる。ワキは自らの言動を恥ずかしく思い、羽衣を返す。ここから囃子が入り、次の【物着】へとつながる。

#### 【物着】

ゆったりとした囃子が奏される囃子のみの小段。ワキがシテに羽衣を返すと、シテは後見座うしろざに移動して後ろ向きに着座。後見がシテに羽衣（長絹）をつける。羽衣を着したシテは舞台へ戻る。

### 四、天女が舞う

〔カカル（掛合）〕おとめはころもをちやくしつゝいっきよくをかなで、まふとかや

高音域を中心に少し旋律のある謡。【物着】から続いて囃子が奏されているが、謡は拍子不合。ここではシテとワキとの掛け合いの謡によって、天人の舞楽への期待が高まる。

〔次第〕あずまあそびのするがまひゝこのときやはじめなるらん

七五・七五・七四の三句からなる短い小段。拍子合。第二句は初句を繰り返す。おもに導入歌として用いられ、その後の行動への意図、感慨などが述べられる。次第の後は、地謡が必ず第二句を省略して同文を低音で繰り返す地取（じとり）を謡う。地取は拍子不合であることが多い。ここでは、東遊の駿河舞はこのとき始まったのだろうか、とい

う感慨が語られる。

〔クリ〕それひさかたのゝひさかたのそらとはなづけたり

クリ音という高い音を含む高音域を主とした謡の小段。拍子不合。〔クリ〕・〔サシ〕・〔クセ〕と続くことが多い。長音を長く、旋律のある部分は膨らませ、のびやかに謡われる。この段における他の小段が比較的落ち着いたものであるのに対し、アクセント的な部分ともいえる。〔久方の空〕の名づけの由来が語られ、天界へと視点が決まっていくなか、〔サシ〕しかるにげつきうでんのありさまよにつたへたるきよくとかや

文意を主として、シテと地謡の掛合がさらさらと謡われる。拍子不合。天界の天人の様子が語られ、シテは、自分もその一人であり、今ここに天下って舞を舞うのだ、と自ら宣言する。

〔クセ〕はるかすみくはくうんのそでぞたへなる

中世の流行芸能である曲舞（くせまい）を取り入れたもの。拍子合。平ノリ。七五調を基本とした叙事的かつ長大な小段であり、一曲の中心部分をなして、謡の聞かせどころともいえる。旋律は低音域から始まって後半は高音域に中心が移り、最後は低音域で謡いおさめる。和歌や漢詩を引用しつつ、天人の舞楽の美しさが形容され、天上世界が地上に現れたかのような表現がなされる。羽衣の〔クセ〕では、最後の部分から太鼓が打ち出す。ここまでは、大鼓と小鼓と笛のみで囃子が奏されているのだが、ここで初めて太鼓の演奏が追加されることで曲調に転機が訪れ、後の序之舞へと繋がっていく。

## 五、天女、さらに舞う

〔詠〕なむきみやうがってんしゝあずまあそびのまひのきよく

舞事の前に置かれる詠吟風の小段。拍子不合。前の段の華やかさを少

し鎮めるように、シテは月世界の天子を礼拝して東遊の舞を始める。

【序之舞】

囃子事の小段、舞事の一種。女体や老体などの役が物静かに舞う。冒頭に「序」と呼ばれる部分があるのが特徴である。舞事の中でも非常に静かに、ゆつたりとした品格をもって奏される。

〔ノリ地〕あるひはゝなびくもかへすもまひのそで

大ノリの謡による小段。基本的に拍子合であるが、冒頭や末尾に拍子不合の句を含むことがある。この小段では、冒頭の「あるひは」が拍子不合で、末尾は句の最後を途中から大ノリを崩すようにして謡われる。風になびく羽衣の美しさが華やかに表現される。

【破之舞】

囃子事の小段、舞事の一種。他の舞事に比べると短く簡潔な舞である。女体や神仙などが序之舞や中之舞の後に軽やかに舞う。【破之舞】の最後の打上打返（うちあげうちかえし）の部分でその軽快さが少しおさまり、華やかながらも静かに最後の段へとうつつっていく。

## 六、天女が去る

〔ノリ地（キリ）〕あすまあそびのかずかずにくかすみにまぎれてうせにけり

能一曲の終曲部分として最終末に置かれる七五調の謡の小段。基本的に初句と終句は繰り返して謡われる。リズム法は曲によってかわる。羽衣の場合は大ノリ。内容としては、話の結末、作者の総括的な感想、シテの後日談などが描かれる。ここでは、シテが地上に様々な恩恵を施し、三保の松原から愛鷹山、そして富士の高嶺へと舞い上がった霞にまぎれて消え失せる様が表現される。

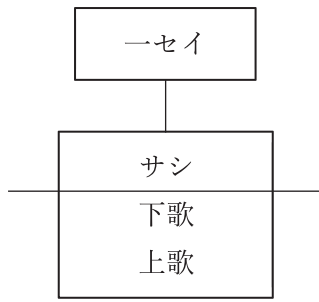


図2 羽衣 第一段の構造

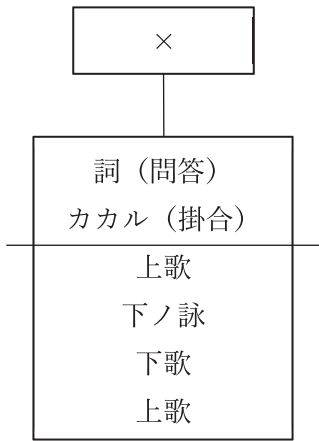


図3 羽衣 第二段の構造

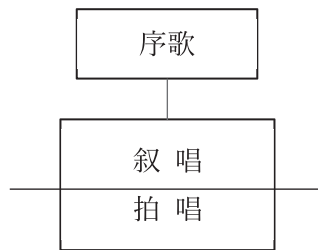


図1 段の典型構造

以上、羽衣の能一曲について、小段を中心に見てきたが、横道氏は図1のように、多くの段に共通する典型的な小段の構造を指摘する。序歌部は短い歌い物で、叙唱部は「サシ」系統の拍の無い（拍子不合）の謡、拍唱部は有拍（拍子合）の謡で「上歌」や「下歌」などがこれにあたる。横道氏も述べているように、すべての段が整った形をしているわけではないが、羽衣の第一段と第二段を当てはめてみると次のようになる（図2、3）。

冒頭で、「段」は、内容だけでなく、形式としても一つのまとまりとなっていることが多いと述べたが、段を構成するパーツである小段は違っているけれども、拍子不合ですらすらと謡われる部分から拍子合の謡への流れ、は共通していることが見て取れるであろう。

今回は羽衣の小段・段について解説したが、他の作品を鑑賞する際にも、能一曲の構成をとらえることの一助となれば幸いである。

注

- (1) 横道万里雄『岩波講座能・狂言Ⅳ能の構造と技法』九能の小段、岩波書店、一九八七、三三九～三四八頁、および、横道万里雄『岩波講座能・狂言Ⅲ能の作者と作品』二能本の概観（四）積層構造、岩波書店、一九八七、五一～六三頁
- (2) このほかに謡・囃子もなく進行する部分があり、横道氏は、仮にシジマ事として扱っている。前掲書『岩波講座能・狂言Ⅳ能の構造と技法』、三三九頁
- (3) 拍子合の謡のリズム法の一つ。七五調の十二音節を基調とする詞章の各句を、八拍子に配分して謡うリズムである。
- (4) 前述の平ノリとは異なり、八拍子の一拍に一字をあててのびやかに謡う。
- (5) 横道氏はさらに、叙唱を無律と有律に、拍唱を低域と高域に、それぞれ分けているが、本論では簡略化のために省略する。前掲書『岩波講座能・狂言Ⅲ能の作者と作品』六一～六三頁

参考文献

- 高桑いづみ・中司由起子連載「小段ってなに？」『観世』七八（一～一二）、二〇一一、『観世』七九（一～一二）、二〇一二、『観世』八〇（一～一二）、二〇一三
- 西野春雄・羽田昶編『新訂増補能・狂言事典』平凡社、一九八七初版、一九九九新訂増補版
- 横道万里雄『岩波講座能・狂言Ⅳ能の構造と技法』岩波書店、一九八七
- 横道万里雄『岩波講座能・狂言Ⅲ能の作者と作品』岩波書店、一九八七
- 横道万里雄・表章校注『謡曲集下』岩波書店、一九六五

